

袋井の昔ばなしマップ



※図中の番号は前ページの紹介および展示パネルの番号と対応しています。
 ※個人が管理している場所もありますので、一言こわってから訪ねてください。

遠江歴史文化ネットワーク事業共催 巡回展

袋井の昔ばなし

遠江の伝説と秘話



油山寺の照姫椿

編集発行 袋井市歴史文化館 〒437-1102 静岡県袋井市浅名1028番地(浅羽支所内)
 TEL.0538-23-9269

参考図書 袋井市農業協同組合『袋井に伝わる昔話』 中遠広域事務組合『中遠昔ばなし』
 袋井市商工課『袋井と日本の民話20選』 袋井市教育委員会『ふくろいの野仏』

袋井市教育委員会

1 いぼとり地蔵

三川地区見取村の「藤左衛門」という庄屋に、「りゅう」という美しい娘がおりました。この娘の体じゅうに「いぼ」ができたので、親子3人で袖の木地蔵にお参りに行きました。妹の「しん」が「お姉さんのいぼをとってくれるなら、私はいぼができてかまいません」と拝みました。



3日ほどたつと姉のいぼはなくなりましたが、妹にいぼができてしまいました。母親はお地蔵様に妹のいぼも治してもらおうように拝みました。すると、妹のいぼも取れました。これ以後、このお地蔵様を「いぼとり地蔵」と呼ぶようになりました。

袋井に伝わる伝説と秘話

袋井市に伝わる伝説や秘話には、徳川家康にゆかりのあるお寺や面白い由来のあるお地蔵様など、さまざまなおはなしが伝えられています。

展示会では、心温まるお話からちょっと不思議なお話まで、市内に伝わる10のお話を紹介します。みなさんもこれを機会に、昔ばなしの地を訪れてみてはどうでしょうか。

2 六地蔵をせおった大宥さん

今井地区の太田村で、若い衆が六地蔵を持ち上げカ自慢をしていましたが、どうしても持ち上げられませんでした。ちょうど、通りかかった小山村の大宥さんに、若い衆が「六地蔵様を背負ったらしくてやるが」と話しかけると、六地蔵を背負い、小山村へすたこら行ってしまいました。



困った太田村の若い衆は、新しい六地蔵を造ってお祀りしたということです。大宥さんが背負っていった六地蔵は、現在でも小山の大場進一さんのお宅に大切に祀られています。



3 鳥居や幟をたてない神社

木原にある許弥神社の神様が、おとなりの土橋の熊野神社へ遊びに行きました。許弥神社の神様が帰ろうとしたとき、鳥居につまづき足にけがをしました。またある時、熊野神社の神様が、許弥神社に遊びに行ったとき、幟で目をついてしまいました。



そういうわけで、今でも熊野神社では鳥居を、許弥神社では幟を立てないようにしているということです。

4 井塚尊

今井地区の小山がかつて小山村だった頃の名主大場九左衛門の死を偲んでつくられた塚です。



当時の小山村は雨が降らず作物が不作だったため、九左衛門が水を引く堀の工事をを行いました。工事は、村人の屋敷等を削ることを伴う困難なものでした。堀の完成後、工事の為の村人への迷惑をわび、九左衛門は自害しました。

作物の出来はよくなり、人々は徳光の西に社を建て、ねんごろに九左衛門を祀りました。

5 可睡和尚

徳川家康が竹千代と呼ばれた子どもの頃、駿府の今川家に人質となっていました。が、岡崎へ逃げたのが、等膳和尚です。後に浜松城主になった家康が、この時のお礼をするため城に和尚を招いたところ、居眠りを始めました。その姿を見た家康は「和尚は私を子供のように思い、安心して眠っているのである。私はその親しい気持をうれしく思う。和尚は睡可し。」と語りました。その後、等膳和尚は可睡和尚と名前を改め、久能の可睡斎という大きなお寺の住職になりました。



可睡和尚は、居眠りを始めました。その姿を見た家康は「和尚は私を子供のように思い、安心して眠っているのである。私はその親しい気持をうれしく思う。和尚は睡可し。」と語りました。その後、等膳和尚は可睡和尚と名前を改め、久能の可睡斎という大きなお寺の住職になりました。

6 油山寺の照姫椿

京の中納言藤原宗茂の娘に、照姫がいました。この姫は、目の治療のため、油山寺にお参りして、目が見えるようになりました。その後、姫は尼さんになりますが、病弱のため若くして亡くなりました。



妹の露姫が、姉が亡くなっていることを知り、哀しみにくれました。すると夢の中に照姫が現れ、「命が絶えても恩返しのために私の魂を椿に託します。」と告げました。夢から覚め薬師堂にいくと、椿の花びらが散っていました。これが、照姫椿です。現在ある照姫椿は二代目ですが、3月になると綺麗な花が咲きます。

7 勅使塚

袋井駅から法多山に行く法多街道の中ごろに勅使塚があります。



勅使(天皇の使者)が定められた日時に法多山に参拝に行くことができなかつたため、この地で自害されたのを地元の村の人々が哀れに思い塚をつくって葬ったとされています。

塚の前には勅使塚の石碑がたっており、雑木林を登ると五輪塔と小さな石の地蔵があります。

8 どんきち山

芝地区の浄瑠璃寺にいた「呑吉」という和尚さんに由来する場所です。



困っている人々を救い、役に立ちたいと生涯思っていた和尚さんが一生を終えた場であったことから呑吉山と呼ばれるようになりました。

この和尚さんの徳はいつまでも人々に語り継がれ、今日でも呑吉山は地元の人々に親しまれています。

9 龍巢院山門の竜

笠原地区五十岡にある龍巢院の山門には、見事な竜の彫刻があります。この竜の彫刻が、毎夜、山門から抜け出して、近所の田んぼや畑を荒らすようになり、五十岡の村人は困りていました。



村人は、龍巢院の「大素」というりっぱな和尚さんに、竜を鎮めてほしいとお願いしました。和尚さんは刀を携え、竜の彫刻に向かってお経を唱え、竜のお腹に刀を突き刺しました。その後、竜が山門から抜け出すことはなくなったそうです。

10 寄木神社のはじまり

江戸時代に、浅羽海岸で大津波がおこった後、中新田の海岸に木造の観音様が漂着しました。村の名主(村長)によると「西同笠村の船が台風で難破し、たどりついた島で見つけた木造の観音様を、毎日拝んでいたところ、願いが通じ無事村に帰ることができた。この観音様を同笠、大野、中新田の3村で神社を建てお祀りしていたが、この前の大津波で流されたのが、この観音様ではないか。」と語りました。難破した船が漁に出た日、村に帰ることのできた日、観音様が海岸で見つかった日は、すべて9日でした。3村の村人は神社を建て直し、毎月9日に観音様をお祀りする日としました。

